

# フローレス ー地方社会と

## ジャトロファ事業に思うことー

中央大学 法学部 政治学科 3年



バリの海岸

今年8月、APEX主催のスタディーツアーに参加しました。そこで思ったこと、感じた事を中心に報告させていただきたいと思います。特にツアーの前半部分、フローレス島について、またフローレス島で行われているジャトロファ事業について報告したいと思います。

### フローレス島へ

インドネシアにはバリ国際空港（ングライ）から入国しました。日本からフローレスには直行便が飛んでいないので、バリを経由し、さらにもう一度トランジットしてフローレス島、マウメレへ向かうことになります。

インドネシアに入国するにはビザを取得する必要があります。私は今まで欧米を中心に数々の国を訪れたことがありますが、これは初めての経験でした。そしてこの日はそのままバリに滞在しました。

また、次の日の朝、早く起きて、バリのビーチに散歩しに行きました。道中、「コンニチハ」と話しかけられることも多く、バリに日本人がいかに多いかということを感じました。

そして最初の目的地であるフローレス島、マウメレへ向かいました。バリから飛行機を乗り継いでやっと着いた（ワイオティ・マウメレ）空港は、新宿や渋谷の駅よりも小さいじんまりとしたところでした。バリの華やかな観光地的な雰囲気から一転、

外国人は私たちだけ、また設備も簡素なものしかない、というこの歴然たる違いに愕然としました。同じ国内で、それも2時間ほどしか離れていないのにこれほどまでに違うのかと思いました。

そのままAPEXの現地オフィスに伺い、ジャトロファ事業に関する説明をしていただきました。APEXは効率的な循環サイクルを構築していて、まさに「環境に負担をかけない適正な」案だと思いました。APEXの軸となっているバイオマスガス化事業にもつながっているし、このシステムについてはなるほど、と感心しました。



マウメレにある事務所で説明を受ける

しかしレロロジャ村の方たちのモチベーションを保つために何かしらの対策はあるのか、疑問に思いました。現在盛んにおこなわれているジャトロファの事業化はまだ一つも成功したことがないそうです。その理由としてNGOが結局種子を買いとらなかった、収入につながるまでに時間がかかるので住民の方のモチベーションが続かない、などを挙げていらっしゃいましたが、これらの問題点を他人事のように考えてい

る点が少し気になりました。

翌日には実際にレロロジャ村を訪れ、村民の方と交流させていただきました。村の方たちは私たちを歓迎してくれて、料理や地酒をふるまってくれました。この地酒は砂糖ヤシを発酵させたもので、1日でできるとおっしゃっていました。ただ食べ物は塩漬けやイモ累が多く、レロロジャ村のような地域では食料の保存が大変なのかなと思いました。



イカット作製も見学

その後ジャトロファセンターという研究施設を訪れ、ジャトロファの苗木作りを実際にやらせていただきました。まだまだ試行錯誤しながら、といった雰囲気でした。



### 村の教育事情

翌日にはレロロジャ村に実際に植樹させていただきました。なかなかの重労働で大変でしたが、いい経験になりました。私たちが集まっているジャトロファを植えていると、村の若者たちが集まってきました。みなさんこのプロジェクトに興味があるようでした。

この日は、レロロジャ村の村長さんと面会

する時間をとっていただくことができました。村の現状について、いろいろとお話を伺いました。その中でも貧困の一因である「教育」について特に報告したいと思います。まず、レロロジャ村には3つの幼稚園があります。ここには現在175名の子供が通っています。小学校は村内に4つあり、563人が通っているそうです。しかし中学校になると、村内にはなく、村から6キロ離れたところにある中学校まで行かなければならないということです。現在63人が通っています。さらに高校については、38キロ離れたところまで行かなければならず、10人が寄宿しながら勉強しているとのことです。小学校から中学校にかけての進学率の低さに非常に驚きました。また、大学まで行ったとしても就職できず、村に帰ってきて農業や、運送業をやるケースがほとんどだそうです。中央政府にフローレス出身者が入ったことは村長さんが知る限りない、とのことで、民族間の差別というものを強く感じました。これから改善していかなければならない点の一つだと思います。

### モニで感じた格差

そして3時間ほどの山道を越え、モニ村を訪れました。険しい山に囲まれ、独特の文化を持っていました。

そこで、地元の方たちがよく行くという温泉に連れて行ってもらいました。水がたまっているところが二つに分かれていて、上流のきれいな方に男性が、その男性が入った後のお湯が流れてくる下流の方に女性が入浴していました。また、男性はのんびりと浸かっている一方、女性は洗濯しながら入浴していました。このような山峡部では女性差別が根強いのだなと感じました。レロロジャ村の村長さんが、都市部では女性が活躍し始めているが農村の方ではそう

いったことはまだ解消されていないとおっしゃっていたことを思い出しました。その後、イカットと呼ばれるかすり織りを見せていただき、また伝統舞踊も見せていただきました。

## 王国の跡地で

また翌日にはクリムトゥ山に登り、日の出を見ました。とてもきれいでした。クリム若者、子供の魂が還っていくと信じられています。



クリムトゥ山の三色カルデラ湖をのぞむ

そして、フローレス島最後の訪問地としてシッカ村を訪れました。フローレス地域にはかつてシッカ帝国という国があり、その首都だったところです。ポルトガルに占領されていた地域で、今でもポルトガル教会が美しい状態のまま残っています。その教会の中では子供たちが礼拝を見せてくれました。イスラム教徒が多いインドネシアにおいて、シッカ村はほとんどの住民がカトリック教徒だそうで、歴史的背景を考えさせられました。

また教会を見学し終えて外に出ると、村の女性たちがそれぞれの作ったイカットを持って道に並んでいました。生活がかかっているのか、必死に売り込んでくる様子に恐怖さえ感じました。同じ貧困という問題を抱えていても、レロロジャ村やモニ

村人々は温かく、希望を持って生きている印象がありました。しかしシッカ村の人々は人生に対して悲観的に生きているように感じました。

この差を小さくしていくために自分には何ができるのだろうと考えました。ただ彼女たちが売りつけてくるイカットを買うだけでは解決しない、もっと根本的な解決を目指していかなければならないと思います。やはり行政が主体となって、底上げするようなシステムを構築していくことが必要なのかなと考えました。

## ギャップを超えて

最後に、ツアー全体を通して苦労したのはやはり食文化に関する所です。恥ずかしながら、さばかれていない魚を日本であまり口にすることがなく、魚の豊富なフローレスにいて、スタッフが用意してくれたバーベQでも、丸焼き状態の魚は食べるのに一苦労でした。またフローレスでは、APEXのオフィスでも、レロロジャ村でも出していた軽食がお芋でした。芋はジャワ島では非常食扱いされているようで、インドネシア国内の格差を感じました。また、味もほとんど同じようなものばかりで、スナック菓子やチョコレートがないという状況に現実味を感じることが出来ませんでした。この経験は私の今までの貧困問題に対する意識を根本から変えてくれたように思います。話で聞くのと、実際に自分が体験することの大きな違いを実感することができました。

以上このツアーを通して私が感じたこと、考えたことを述べてきました。このツアーに参加して私は自分自身大きく成長することができたと思います。今回このような機会を頂けたことに感謝します。ありがとうございました。